

Hans-Dieter Klingemann and Bernhard Weßels. 2009. "How Voters Cope with the Complexity of Their Political Environment: Differentiation of Political Supply, Effectiveness of Electoral Institutions, and the Calculus of Voting" In Hans-Dieter Klingemann (Ed.), *The Comparative Study of Electoral Systems* (pp. 237-265). Oxford, UK: Oxford University Press

ソングェヒョン
法学研究科 M2 宋財沄

1. 理論的起源

□政治的(マクロ)文脈(=政治的環境)が個人(ミクロ)レベルの投票行動に与える影響の検証

□政治的環境の二つの要素

- 1) 政治的供給(political supply) : 競合する政党や候補者の数・強度
政治的供給の増加→有権者は自分の選択基準(criteria)を絞る誘因を有する
- 2) 選挙制度の有効性(effectiveness) : 議席変換
変換の比例性の向上→有権者は自分の選択基準を絞る誘因を有する

□選挙の種類によっても基準は変わりうる(政党名簿投票、候補者投票、大統領投票)

□有権者の選択基準 1)政党好感度 2)候補者好感度 3)イシュー

□有権者の選挙の種類によって異なる選択基準を用いるが、それは政治的環境によって相殺もしくは強化される。

□これらのメカニズムは複雑性の増加が情報コストに影響を与える事から生ずる。

2. データセット

□26カ国、29回の選挙

□PR : 15カ国 / 多数制 : 3カ国 / 混合制 : 8カ国

□分析対象 : 20回の政党名簿式選挙、10回の多数制選挙、7回の大統領選挙

3. 政治的文脈の操作化

□政治的供給 (Differentiation of Political Supply)

- ①政党の数(急進的な政党を除く)
- ②選挙区ごとの平均政党・候補者数
- ③有効政党数

□選挙制度の有効性 (Effectiveness of Electoral Institutions)

- ①全選挙区に対する候補者選挙区の比率(0 : 純粋比例代表制)
- ②閾値(多数制の場合、基本的に閾値はないが、AVや二回投票制は50%になる)
- ③選挙区定数(対数変換)

□上記の2つの政治的文脈は各三つの要素を含むため、一つの変数として扱うために因子分析

4. 記述統計(Table 11.3 & Figure 11.1)

選挙制度の有効性はPRで高く、候補者・大統領選挙では低い傾向
(PR>候補者>大統領)

政治的供給と選挙の種類による明確な差はないが、民主主義の経験が浅い国において高い傾向(例:旧共産圏)

5. 選択基準および従属変数の操作化

投票選択に用いられる評価基準

- ① 政党好感度(0~10)
- ② 候補者好感度(0~10)
- ③ 争点距離(abs(自分のイデオロギー評価 - 各政党に対するイデオロギー評価))

従属変数は特定政党に投票したか/しなかったか(=二項変数)

欠損値についてはランダム多重代入法(multiple random imputation)を用いて処理

分析手法として条件付きロジット分析

6. 分析結果

ミクロレベルにおける分析

- ・ IV: 政党選択
 - ・ DV: 政党好感度、候補者好感度、争点距離
- ⇒ 三つの選択基準は三種類の選挙において有意
⇒ 政党・候補者好感度は正の影響、争点距離は負の影響

ミクローマクロ交互作用モデル

- ・ 上記のモデルに
 - ① 政治的文脈の変数(政治的供給、選挙制度の有効性) (2)
 - ② 政治的文脈の交差項(供給×有効性) (1)
 - ③ 政治的文脈と選択基準の交差項(①×選択基準) (6)
 - ④ 政治的文脈の交差項と選択基準の交差項(②×選択基準) (3)
 という12個の変数を追加

個別の係数の多くが有意であるが、本章においてはミクロ要因とマクロ要因の交互作用の限界効果に注目

cf) しかし大統領選挙における争点距離の影響力は交差項を含めて有意でない

7. ミクローマクロ要因の限界効果

仮説

表1. 本章の仮説

	政党名簿式投票	候補者投票	大統領投票
政党好感度	+	-	-
候補者好感度	-	+	-
争点距離	-(高)	-(低)	-(低)

Note: pp. 256-257 より筆者作成

□政治的供給の変化(p.258, Figure 11.2)

表2. 政治的供給の変化と有権者の選択基準の限界効果

	政党名簿式投票	候補者投票	大統領投票
政党好感度	.223 + .082×供給	.962 - .347×供給	.385 - .126×供給
候補者好感度	.234 - .036×供給	-.166 + .241×供給	.320 + .108×供給
争点距離	-.040 - .047×供給	.081 - .156×供給	-.120 + .003×供給

Note : pp. 255-257 より筆者作成

- ・政党好感度と政治的供給：全ての仮説が有意
- ・候補者高感度と政治的供給：大統領投票の符号が逆
- ・争点距離と政治的供給：候補者投票において影響力が高い／大統領投票の符号が逆

□選挙制度の有効性の変化(p.259, Figure 11.2)

表3. 選挙制度の有効性の変化と有権者の選択基準の限界効果

	政党名簿式投票	候補者投票	大統領投票
政党好感度	.223 + .467×有効性	.962 - .467×有効性	.385 - .041×有効性
候補者好感度	.234 - .137×有効性	-.166 + .281×有効性	.320 + .146×有効性
争点距離	-.040 - .428×有効性	.081 - .103×有効性	-.120 + .072×有効性

Note : pp. 255-257 より筆者作成

- ・政党好感度と有効性：全ての仮説が有意
- ・候補者高感度と有効性：全ての仮説が有意
- ・争点距離と有効性：大統領投票の符号が逆
cf) 大統領の場合、制度の有効性の幅が狭いため慎重な解釈を要する

□トレードオフおよび強化

- ・上記の分析により有権者の投票決定に用いられる基準は政治的供給と選挙制度の有効性によって変化する事が確認
- ・有権者は政治的選択肢が複雑になり、有効性が高くなるほど一つの基準に重点を置く事でコストを減らす
- ・政治的供給を固定した場合、選挙制度の有効性の向上は有権者の選択基準の影響力を強化 (p.262, Figure 11.3, pp.255-256, Table 11.5 の β_{13-15})

⇒有権者の選択基準は政治的供給、選挙制度の有効性、両者の交互作用から影響

8. 結論

- 有権者の投票決定は選挙の種類だけでなく政党、候補者、争点という基準も考慮
- しかし、これらは政治的文脈によって強度や方向が変わりうる事が明らかに
- 政治的状況がより複雑になると有権者はその複雑性を減らす誘因を持ち、基準を単純化し、強化する傾向
- 基本的に有権者は選挙の種類によって異なる選択基準を用いるが、それは政治的文脈およびその文脈の交互作用によって変動

9. コメント

- マクロ要因とミクロ要因の交互作用を多角的に検証した事は大変面白かったと思う。ただ、サンプル数が極めて大きいためほとんどの結果が有意ではあったが、それが有意な影響がどうかは未だよく分からない。
- 本章において用いられた二つのマクロ要因はある意味で強い関係を持っていると思う。つまり本章の選挙制度の有効性の操作化(レジュメ p.1 第3節)は小政党がどれほど議会に進出しやすいかを表すと思われる。248頁の図11.1を見ると両者の間には相関が強くないように見えるが、選挙ごとに見ると(■、○、●)両者の間には強い負の相関が見られる。また本章の分析は選挙の種類ごとに分析を行ったと思うが、こうなると政治的供給と選挙制度の有効性は似たような影響を持つと思われる。
- 争点距離の操作化がやや怪しいと思う。250-251頁を見ると争点距離ではなく政党のイデオロギー距離を測定した事が分かる。イデオロギーと争点が結合している国はこれでも大丈夫だと思うが、そうでない国もあろう。
- 本章では候補者投票と大統領選挙を分けて分析したが、実は候補者を選ぶ事としては同じだと思う。むしろ両選挙における有権者のロジックは異なりうる事は認めるが、仮説の段階で候補者好感度の符号が逆だという事は納得できない。